

和歌山県美浜町における煙樹ヶ浜松林の環境保全活動による 防災教育と観光資源の保持との関係

児玉恵理

岐阜工業高等専門学校

本稿では、和歌山県美浜町における煙樹ヶ浜松林の環境保全活動が防災教育と観光資源の保持とどのような関係になっているかを考察する。地域住民の要望により、行政が主体となって松林の保全・管理が行われている。そして、南海トラフ地震の発生が予想される和歌山県の沿岸部では、松林の伐採や松の植樹などの防災教育が実施されている。煙樹ヶ浜松林の一部は、地域住民の交流の場だけでなく、次世代のための防災教育と地域活性化の場でもある。また、江戸時代から継承されてきた煙樹ヶ浜松林は、地域の防災資源であるとともに観光資源でもある。煙樹ヶ浜は、アニメの聖地としてコンテンツ・ツーリズムにおける目的地にもなっている。そのようななかかわりにおいて、環境保全活動は、物語による学校における防災教育と防災・減災対策における地域住民との連携による防災教育の両方と関係している。そこに煙樹ヶ浜の自然景観と文化的景観の保持も連関し、それらが相互に機能して煙樹ヶ浜松林は持続可能となる。

キーワード：煙樹ヶ浜松林、防災教育、コンテンツ・ツーリズム、環境保全型農業、和歌山県美浜町

I はじめに

日本において、予期せぬ自然災害が多発している。特に、地震に伴う津波や台風、局地的豪雨などによる水害は、今後も各地域で周期的に起こるであろう。東日本大震災以降、防災機能を有する海岸林の保全の重要性が増している。今後起こる可能性が高い南海トラフ地震発生時において、和歌山県は、地理的特性から土砂災害、津波被害、河川氾濫など多様な自然災害が発生するリスクが高い地域である（高田・桑子，2019）。たとえば、1953年の7月18日に起きた水害の記録をもとにした御坊市の救援物資輸送の研究では、近い将来に予想される災害への対応の課題を検討している（荒木，2020）。そのような自然災害が想定される和歌山県では熊野古道に関連する事物が多く存在し、それらの地域の歴史文化を象徴する文化遺産を観光資源として活用する動きがある。その動きの中で、和歌山県美浜町にある海岸林の煙樹ヶ浜

松林は、防災機能とともに、自然景観の面や文化景観といえる面もあわせもつ観光資源の対象となっている。すなわち、海岸林の環境保全は、防災・減災対策となり、景観の保持にもなり、さらに自然災害による文化遺産の消失を防ぐことにもなる。

東日本大震災の翌年には、防災教育に関する報告書が出版され（東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議，2012）、シンポジウムが開催されている（村山，2012）。ここでは、防災教育に、自然災害の知識と防災スキルが備えられ、防災行動の臨機応変な判断を涵養することなどが求められるとしている。そして、東日本大震災後10年目となり、震災直後と同じような観点から、特集論文という形式で出版されている（ひょうご震災記念21世紀研究機構総合検証，2021）。また、将来起こりうる南海トラフ地震の防災教育として、東日本大震災の教訓から学校での防災教育を再考し（近藤，2013）、学校